

## 骨が語るヨーロッパ

鬼 東 佳 代

### 0. 序

「骨」。人体を構成するモノの中で最も堅い部分。原始時代には人間の食糧であったとさえいわれ<sup>1</sup>、死者が最後にこの世に残すモノ。

日本では死者の骨を巡って、遺族たちが争うことも珍しくない。なぜなら多くの日本人が今も尚、モノには魂が宿るというアニミズム思想を心のどこかで抱いており、死者の骨も又例外ではないからだ。

「モノに魂が宿る」という考えは、我々の日常生活の随所に行き渡っている。例えば頻繁に交通事故が起こる現場があったとする。するとその原因は「見通しが悪い」や「交通量が多すぎる」のではなく、「霊が呼ぶ」ためであり、成仏できない死者の霊が夜中にさまよっているのを見たなどと、まことしやかに噂になる。場合によっては霊媒師が呼ばれ、霊と交信したり、お祓いをする。

あるいは古い人形には魂が宿ると信じられ、迂闊にゴミと棄てるようなことはしてはならない。

毎年2月8日か12月8日のいずれかに、折れた針などを集めて行われる針供養も、針に単なるモノ以上の意味づけがなされ、謝意や敬意を表すために行われる儀式である。

他人に鏡や櫛を贈ってはいけない。又恋人にハサミや針を贈るのは縁起が悪い。何故ならそれは恋人同士が絶交、あるいは別れてしまうかもしれないからだ<sup>2</sup>。こういったタブーも又、モノ本来が持つ、何かを映したり切ったりという機能や、割れる、あるいはひびが入る、歯が欠ける

---

1 島泰三：『親指はなぜ太いのか』、中央公論新社、2003年、197～206ページ参照。

2 Vgl. Engekien, August/Lahn, Wilhelm: Der Volksmund in der Mark Brandenburg. Georg Olms Verlag, 1976, S. 244.

という性質から生まれ出たアニミズムが、「迷信」という形で我々の慣習に残ったものである。タブーを気にするのは何も一部の地域で、なおかつ特定の年齢層に限られたことではない。

中にはそれがアニミズムであるということが意識されないままの場合もある。例えば恋愛——多くは片思いの際に——で、それは多く見られる。あなたが意中の人が所持しているモノの一部を手に入れたとする。それは髪でも学用品でも、その人に関連するモノなら何でもいい。あなたにとって、たとえそれが書き損じのメモ用紙であったとしても、それは単なるモノではなく、まるでその人自身のように大切な宝物になるのではないだろうか。

恋人の写真を部屋に置く、あるいは手帳に挟んで携帯する。するとあなたには、まるでその人がいつでも自分のそばにいて、自分を包んでくれているように思えるのではないだろうか。

又逆に、自分が気に入らない人のモノは何でも気に入らない。以前「夫の下着を箆でつまんで洗濯する妻」がいる、実に嘆かわしいことだと話題になったことがあったが、あれも夫の洗濯物が「モノ」として実際に汚いというのではなく、夫という人に関連するモノだ、という意識がそうさせたのであろう。

このようにある人が生きている場合でも、モノは愛憎の対象になり得るのだ。それが二度と会うことのできない愛しい故人のモノであればいっそう価値が高まるのは当然のことである。ましてそれが故人を形成していた「骨」となれば、その思い入れも格別である。

飛行機あるいは海難事故の被害者の遺体や遺骨を、あれほど熱心に搜索するのは、遺体や遺骨がいつまでも放置されたままだと、死者がその場から離れられず、いつまでも成仏できないと信じているからである<sup>3</sup>。

---

3 当然のことながらそういった思いは、民間伝承の題材にもなっている。例えば陸中上閉伊（かみへい）郡に伝わる『春の野路から』という話では、人知れず死んで骸骨になった娘がいつまでも成仏できずにいた。娘は偶然知り合った爺に、自分と一緒に法事に潜り込んでくれるように頼み、どうにか家族に骨を見つけてもらいようやく成仏する。

柳田国男：『日本の昔話』、新潮社、1983年、39～41ページ参照。

死者は弔われて初めて、安らかに眠ることができるのだ。

そして身内の者が死者に花を手向け経を上げてもらうのは、死者がある世で平穏に暮らせるようにという、死者のための儀式であるとともに、そうすることによって心の安定を保とうとする生者のためのものでもあるのだ。

墓を長い間訪れないと「死者が嘆く」。家庭で良くないことが続くと「死者の祟り」とされる。そういった観念が通用するのは、たとえ「死」によって分断されたとしても、そこに死者に関連するモノが存在する限り、何らかの影響を及ぼすことができる、という思想があるからだ。

骨を引き取ったからといって、決してその人自身が生き返るわけでもないのに、関係者間で諍いが生じることがままあることや、日本の民法で骨を遺産の一つとして認めている<sup>4</sup>ことも、多くの日本人にとっては決して理解できないことではないだろう。

だが宗教に関する本を繙いてみると、日本人の遺骨の扱い方、遺骨への思い入れは、外国の人々、特にキリスト教徒たちの目にはかなり奇異なことに映る、と書いているものが少なくない。たとえばオックスフォード大学の歴史学の教授であり、イギリス国教会の聖職者でもあるジョン・マクマナーズは、日本人が遺骨を恭しく扱い保存する慣習を、死者の顔に絵の具で着色したり（アメリカ・インディアン）、死体を切り刻んで陶器の鉢に貯蔵したり（バレーアス諸島）、酒に入れる（オリノコ川流域）など、未開人と呼ばれる人々<sup>5</sup>の行為と並ぶ異習・奇習の一つであると、著書『死と啓蒙』の中で紹介している<sup>6</sup>。

4 大正10年7月25日、大審院は、この民法八九六条、並びに八九七条（当時は第八八七条）にのっとり、遺骨を巡る引き渡し請求の原告側の上告を棄却している。

5 ここでいう「未開人」とは「高度経済社会に属さない人々」という意味合いである。「未開人」という表現は、文明化された西洋社会を基準点とした際、その基準点に満たない社会に対する差別用語である。しかしマクマナーズがこの書を著した当時、いわゆる「文明」を持たない族を「未開民族」と呼ぶのが一般的であった民俗学的背景を鑑みて、あえてこの表現を使うことをご宥願したい。

6 McManners, John: *Death and the Enlightenment*. Oxford University Press, 1981, S. 295.

日本のこういった慣習は、仏教、儒教双方の影響を受け、更に日本古来の「ケガレ」思想と融合し、本来の仏教とは形を変えて定着していったものである。仏教にとって死後の肉体は単なる容れ物にすぎず、肝心なのは輪廻転生を繰り返す、あるいは解脱する魂である。不要になった器——すなわち遺体——を焼くのは、そこに仏教的な意味が何ら存在していないからだ。「有形なもの」を残すことを厭うインド仏教では、墓すら必要ない。

ただし釈迦牟尼尊の死後、その遺骨（仏舍利）をストゥーパ（塔）に奉安し祭祀する仏舍利崇拜が起り、一部の聖者達の場合でもそれが適用されてはいるが、これらの行為は極めて特殊である。まして焼いた後の骨を拝んだり、丁重に扱ったりすることは仏教では絶対にあり得ない。これは明らかに仏教以外の考え、儒教の「死とともに抜けでた靈魂が再びもどってきて、憑りつく可能性を持つ」<sup>7</sup>という思想に基づくものだ<sup>8</sup>。

このように仏教の生まれた地、インドでも「骨を特別に神聖視する」ということはかなり特殊なものであるのだから、骨を焼き、骨壺に納めるといった一般的な日本人の葬祭儀礼が、全く宗教の異なる人々から見れば奇妙なものに思えたとしても無理からぬことである。

その上火葬場によっては、茶毘に付した後の骨を係員が遺族らに、それがどの部位の骨であるかを説明してくれるところもある、といえ西洋人は腰を抜かしてしまうかもしれない。

だが本当に日本人や特定の地域以外の人々は、骨に何ら特別な感情を抱いてこなかったのだろうか。特に「キリスト教」という、日本とは全く異なる宗教思想の上に成り立つヨーロッパでは、歴史上一度も死者の骨に特別な感情を抱くことはなかったのだろうか。

そこで私は、聖書に次いで最も多くの人々に読まれ、親しまれている『グリム童話』を取り上げ、それらのメルヒェンからこの問題を考えてみたい。

---

7 加地伸行：『儒教とは何か』、中公新書、1990年、iv ページ。

8 ただし儒教で死者の靈魂が戻ってくるのは「骨」ではなく「遺体」である。そのため儒教では遺体は土葬される。

あえてメルヒェンの中にその痕跡を求めるのは、メルヒェンとは、文学、民俗学、心理学、教育学、法律学、経済学、フェミニズム等に至るまで、実に様々な角度からのアプローチを可能とするだけでなく、それ自体が純粹に過去から現在へと文化を伝えてきた「遺産」だからである。

なるほどこの童話集は、兄弟が当初意図していた「真にゲルマン的なもの」というものからは外れてしまっている。その上版を重ねるたびに兄弟によって表現や単語が書き換えられたり削除されたりしたことにより、明らかに兄弟の価値観が入ってしまったことは否めない。しかしこれらが民衆の間で口伝えに母から子へ、祖母から孫へ、あるいは単調な糸紡ぎの作業をする際の気晴らしに、女性たちの間で語られてきた„Volksmärchen“の結集であることには変わらない。その中で繰り広げられる世界は明らかにかつての風習であり、生活、すなわち文化である。このメルヒェンという文化遺産をなおざりにしてしまうのは、まさに「宝の持ち腐れ」である。

さてその遺産の中に骨が登場するメルヒェンは、全部で五つある。『唄う骨』(KHM28: Der singende Knochen)、『フィッチャーの鳥』(KHM46: Fitchers Vogel)、『ねずの木の話』(KHM47: Von dem Machandelboom)、『からす』(Die Krähen)、『旅あるき二人の職人』の後に続く作品でKHM番号はない)、そして『のんき坊主』(KHM81: Bruder Lustig)である。これらのメルヒェンの中で、骨がどのような役目を担っているのかということを考察しながら、ヨーロッパにおける骨の位置づけを本論では探ってみたい。

## 1. 「骨」とグリム童話

### 1.1. それぞれの「骨」の役割

ここでは先に挙げた五つのメルヒェンの内容を具体的に見ながら、骨の役割別にタイプを大まかに三つに分けてみよう。

#### タイプ1: 「飾り」としての骨

結論から述べるなら、このタイプに分けられる骨は、物語に登場しているが、それらが直接的に物語の進行に関わっていない場合である。

たとえば『フィッチャーの鳥』<sup>9</sup>では、髑髏は窓辺で夫を見送る花嫁のふりをする。それは新婦の言いつけで彼女の実家に使いに出かける未来の夫に、「見張られている」という心理的な圧迫は加えてはいる。しかし花嫁が逃げ出すのは夫の姿が見えなくなった後なので、髑髏はその後特別な働きをする必要もなく、当然のことながらメルヒェンの中でもそれ以後、この髑髏に関する記述はどこにも見あたらない。

また『からす』<sup>10</sup>では、骨は最後に「遺骨」という形でしか登場しない。このメルヒェンは仲間二人に裏切られひどい目にあった兵隊が、からすの話を耳にしたことから視力を取り戻し、お姫様と結婚する。後日、元の仲間二人もその幸福に預かろうとするが、失敗してからすにつつき殺されてしまう。哀れに思った元兵隊は、彼らの遺骨を墓に葬ってやる。物語はここで終わっており、もちろん埋められた骨の後日談など一切ない。

#### タイプ2：「告発者」としての骨

一方骨が積極的に物語の進行役を果たすのが『歌う骨』<sup>11</sup>と『ねずの木の話』<sup>12</sup>である。この二つのメルヒェンには「殺された者の骨が第三者を通して真実を言う」という共通点があり、骨はいわば「告発者」としての重責を担っている。

これらのメルヒェンの主人公は、どちらも近い者の手によって殺され、犯行は完全犯罪のように思えた。しかし「天網恢々疎にして漏らさず」とはよく言ったもので、悪事は第三者の手を通して暴露される。ここでいう第三者とは『唄う骨』では、羊飼いが死者の骨から作った歌口から流れ出た歌であり、『ねずの木の話』では、骨が埋められた場所から

---

9 Vgl. Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, die Ausgabe letzter Hand. Bd. 1, Philipp Reclam Jun, Stuttgart, 1999, S. 235ff.

10 Vgl. Die Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm, die dritten Ausgabe (1837). Deutscher Klassiker Verlag, 1999, S. 457ff.

11 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 164ff.

12 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 239ff.

ねずの木<sup>13</sup>が生え、そこから生まれた鳥がその役目を果たしている。しかもこの話では、最後に死んだはずの少年が復活し、まるで何事もなかったかのように日常の生活に戻っている。

骨が真実を唄う、あるいは死者の骨から植物が生え、そこから鳥が生まれるなど、一見奇妙な話に思えるが、実はこれらによく似た話は、導入部に多少の地域差はあるにせよ、世界中に分布している。

例えば『唄う骨』の類話としては、日本の鹿児島県に伝わる『唄い骸骨』と、日本各地に分布する『継子と笛』が挙げられる。

『唄い骸骨』ではグリムの『唄う骨』同様、ある男が嫉妬から、別の男を殺してしまう。数年後、男は自分が殺めた者の骨だとは知らずに、歌を唄うしゃれこうべを見つけ、それを金儲けの道具にしようとする。ところがしゃれこうべが肝心なときに唄わなかったためその計画は失敗し、男は打ち首になってしまう。しゃれこうべは最後に「唄わない」ことで自分の無念を晴らしたという筋書きなので、グリムの『唄う骨』と全く同じというわけではないが、骨が「告発者」として活躍することに変わりはない。

一方『継子と笛』では、父の不在中に継母が二人の子を溺死させ、その屍を山に埋めてしまう。その後他家へ預けていた実子を引き取り生活する。ところがある日兄弟を埋めたところから竹が生え、何も知らない実子はそれを使って笛を作った。笛の音は父のいる江戸まで届き、不安になった父は急遽帰郷する。そこで妻の悪事を知り、実子とともに妻を押し出してしまふ。その後亡くなった前妻と観音様のおかげで兄弟は無事に生き返り<sup>14</sup>、父子3人で仲良く暮らした、という話である。

---

13 タキトゥスの『ゲルマニア』によると、このねずの木は、然るべき人を荼毘に付す際に用いられた香木であった。「死」の儀式に用いられる木から新たな生命が生まれ、それが後に「死者の復活」へと繋がっていくことは、かつてのゲルマン民族の死生観を見る上でも非常に面白い点である。

14 丸山久子は、死んだ兄弟が蘇生するのに観音様が出てくるのは、信仰者の手を経ていたためではないかと推測する。稲田浩二他：『日本昔話事典』、弘文堂、1977年、872～874ページ参照。

同様にフランスの『金のバラ』<sup>15</sup>でも、王国の跡目を巡って兄が妹を殺してしまう。しかしある時羊飼いが殺された妹の骨を見つけ、それで笛を作ると、笛は兄の犯罪を唄いだしてしまう。すぐにこのことは両親の耳にも入り、兄は処刑される。その後幸いにも妹は妖精のおかげで元の姿に戻り、両親から王国を引き継ぐことができた。

他にヨーロッパの類話は、その土地の特色や好みに合わせて、登場人物や設定に多少の変化が見られる。「ロシアでは森に木の実を取りに行った三姉妹の末娘が姉たちに殺される話」<sup>16</sup>に、「イタリアでは王の目の病気を治す薬を探しに行く三人兄弟というのが圧倒的」<sup>17</sup>であり、「スペインの場合はその薬は花であることが多い」<sup>18</sup>。

又インドにも、筋書きは多少違っているが『二人の姉妹』<sup>19</sup>という話が似たようなストーリーを持っている。ここでは殺された——殺したのは人間ではなく虎であるが——姉の骨や髪から植物が生え、その植物から楽器を作ると歌を唄いだしている。ここでもやはり『唄う骨』と主要な点で合致している。

一方『ねずの木の話』の類話の一つにスウェーデンの『性悪な母親』<sup>20</sup>がある。ここでは継母に殺されるのは少年ではなく少女であり、彼女の骨を集めるのは継母の実子、マレーナという少女であるが、やはり鳥が母親の犯罪を唄い、彼女に復讐——すなわち殺害——した後で元の少女の姿に戻っている。

この手の話がヨーロッパに限ったことではない証拠に、アラブの民話

---

15 新倉朗子編訳：『フランス民話集』、岩波書店、1993年、222～226ページ参照。

16 剣持弘子編訳：『イタリアの昔話 トスカーナ地方』、三弥井書店、1992年、42ページ。

17 剣持、1992年、42ページ。

18 剣持、1992年、42ページ。

19 A. K. ラーマスジャン編（中島健訳）：『インドの民話』、青土社、1995年、122～124ページ参照。

20 ローン・シグセン／ジョージ・ブレッチャー編（米原まり子訳）：『スウェーデンの民話』、青土社、1996年、271～272ページ参照。



『緑の雄鶏』<sup>21</sup>が挙げられる。やはり継子を疎ましく思っていた母親が、食べ尽くしてしまった肉料理の代わりに、二人の継子のうち、弟の方を殺し煮込んで食べてしまう。指輪をはめた弟の小指を鍋の中に見つけた姉が彼の骨を集め、鶏小屋の近くに埋めてやる。すると巨大な雄鶏が現れ、継母の殺人を喰い、最後には母親と知らなかったとはいえ、自分を食べてしまった実の父親を殺し、元の少年の姿に戻っている。こちらも細かいところまでグリムの話と全く同じというわけではないが、やはり「告発者」という点は変わっていない。

ところでこの話では骨から植物が生まれている。こういった現象もまた、グリムのメルヒェンにだけ現れる特別なことではない。グリムと同じくドイツのメルヒェン『たまご姫』<sup>22</sup>では、ゴミために棄てられた黄金の魚の骨から、金色の葉をした木が生えている。

あるいはかの有名な『トリスタンとイゾルデ』<sup>23</sup>では、愛し合う恋人たちの墓からは死後一年ほどたったある日、イチイの木が生え、それは誰にも引き離せないほどしっかりと絡み合っている。ケルトの民話では、亡き夫を思い続けるデルドレの墓からも又イチイの木が生えている<sup>24</sup>。

その他、一見ヨーロッパとは全く異なった人種・文化を持つと考えられるアジアにおいても、数々の民話の中にその現象は登場する。その一つとしてチベット族に伝わる『茶と塩のはなし』<sup>25</sup>では、親たちによって引き裂かれ、死んでしまった若いカップルの骨が埋められた場所からは柳が生えているし、満族のものでは、仙人によって鳳凰の姿に変えてもらった後、息絶えた二人が埋まった場所からやはり二本の木が生えている。(『若者とはすのはなし』<sup>26</sup>。)

---

21 イネア・ブシュナク編（久保儀明訳）：『アラブの民話』、青土社、1995年、228～231ページ参照。

22 小沢俊夫編・訳：『世界の民話①ドイツ・スイス』、ぎょうせい、1976年、41～48ページ参照。

23 フランク・ディレイニー（鶴岡真弓訳）：『ケルトの神話・伝説』、創元社、2000年、348～380ページ参照。

24 ディレイニー（鶴岡訳）、2000年、133～147ページ参照。

25 君島久子・太田大八：『アジアの民話』、講談社、1982年、167～178ページ参照。

26 君島・太田、1982年、199～202ページ参照。

そしてこの日本でも、死骸から植物が生えたという話が数多く残っている。その代表例が隣家の強欲じいさんに殺された飼い犬を埋めたところ、桜の木が生えてきて…と、昔話の中で最も有名なものの一つ、『花咲じいさん』であろう。

その他に地方によっては、ある種の木は、鶏の死骸<sup>27</sup>、あるいは猫の死骸<sup>28</sup>の上に生えてきた、と言い伝えられている。

### タイプ3：復活する骨

先に挙げた『ねずの木の話』のところでも少しだけ触れたが、死んでしまった者が、残された骨を利用して生前と全く変わらぬ姿で蘇る話がある。そのタイプに入るのが『ねずの木の話』と『のんき坊主』<sup>29</sup>である。『ねずの木の話』では、死者の骨が一本も欠けることなく集められたことで少年が復活している。そしてまた後者の『のんき坊主』では、死者の骨を誤ることなく、その配列に従って並べることができれば死者は生き返ることができる。

また『ねずの木の話』と『唄う骨』が入り交じったストーリーを持つユダヤのメルヒェン、『モイシェレとシェインデレ』<sup>30</sup>でも、皿を割ったために継母から殺害され、食べられてしまったモイシェレは、自分の骨からの復活を果たしている。彼はまさか食糧にされているなど、継母以外の誰にも知られていなかったのも、骨を順序通りに並べられてはいないが、すべての骨が食べられ、窓の外に放り投げられたため、無事に蘇

27 広島市安佐町に伝わる民話。竜宮城からの土産としてもらった金の玉を産む鶏の亡骸を埋めたところ、木が生え、美味しい実をつけたので学者に名前を聞いたところ、ミカンだといわれたのがミカンの木の始まりとされている。

28 長崎県や対馬に伝わる民話。やはり竜宮から持ち帰った黄金の糞をする黒猫が死に、その後死骸を埋めた場所から橙の木が生えた。黄金を出した猫から生まれたので縁起のいいもののだとして、それ以来お正月には橙を飾ようになったといわれている。

29 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 392ff.

30 ビアトリス・S・ヴァインライヒ編（秦剛平訳）：『イディッシュの民話』、青土社、1995年、93～96ページ参照。

ったのだ。

同様にレンミンカイネンの母は、殺された哀れな息子の遺体を急流の中からかき集め、息子を自らの手で生き返らせている<sup>31</sup>。

これらタイプ2と3に見られるように、元来骨は、たとえそれを所有していたものが肉体的な死を迎えたとしても、また形を変えて新たな生命を生み出す、あるいは生前のまま復活することができる、と考えられていたことを窺い知ることができる。

この普遍性故に、骨は生命の根本を司るものの象徴とされ、特別な力があるものと見なされ、世界各地で保存・崇拝の対象となった。

『世界シンボル辞典』でも、骨は「不壊の生命原理、本質的なもの。復活と同時に、死すべき生命やはかなさをもあらわす。骨を壊せば復活を妨げることが出来るとしばしば考えられている」<sup>32</sup>とある。

そのため悪戯のすぎたロキは、女神ジフの夫トールに骨を砕かれかかるし<sup>33</sup>、少女を悩ませた男は墓から掘り起こされ、大きな薪の山で焼かれねばならなかった。（『ジブシーの死せる婚約者』<sup>34</sup>。）又この世にある全ての苦痛や厄介事をなくしてしまうために、きこりは人類の祖先、アダムの骨を焼いてしまおうと考える。（『人類の父、アダムの骨』<sup>35</sup>。）

そして魔女迫害の際には、魔女の体は骨が絶対に残らないようにと火刑に処されたのだ。というのも万が一骨が残っていれば、そこからまた恐ろしい魔女が蘇ってしまう。当時の人々があれほど熱心に魔女を焼いたのは、決して魔女の苦しむ姿を見たいというサディズムではなく、骨

---

31 小泉保：『カレワラ神話と日本神話』、日本放送出版協会、1999年、93～98ページ参照。

32 J. C. クーパー（岩崎宗治／鈴木繁夫訳）：『世界シンボル辞典』、三省堂、1992年、32ページ。

33 ライナー・テッツナー編（手嶋竹司訳）：『ゲルマン神話 上』、青土社、1998年、49～56ページ、『ロキが神々を罵倒する』参照。

34 シグセン／ブレッチャー編（米原訳）、1996年、84～85ページ参照。

35 イネア・ブシュナク編（久保儀明訳）：『アラブの民話』、青土社、1995年、409～411ページ参照。

にまつわる民間信仰にのっとった思いからなのだ。

ところで2002年2月9日に英国エリザベス女王の妹、マーガレット王女が71歳で亡くなった。王女の死は当然各国に報道された。ところがこれには後日談があり、遺体が本人の希望で茶毘に付されたこともまたニュースになったのだ。何故そんな事が一々ニュースになるのかと、日本人なら首を傾げるところだが、やはりキリスト教国家の英王室では、火葬は極めて異例だという。魔女狩りの時代においてですら、英国では火炙りではなく絞首刑が魔女の処刑に適用されている。

そもそも英語圏の迷信・俗信では「骨を焼く」のは大変縁起が悪いと見なされているらしい。「骨を焼くことは、大変不吉なこと」<sup>36</sup>あるいは「もし骨を焼くと、自らを焼くことになる」<sup>37</sup>とされているから、火葬を選んだ王女の死は、非常に大きなニュース性を含んでいたことになる。王女の火葬はヨーロッパの人々に、あの魔女迫害の時代を彷彿とさせたかもしれない。

ところでグリムのメルヒェンでは『ねずの木の話』の少年にしろ、『のんき坊主』の王女にしろ骨から復活することができるのは、骨が完全にそろっている者たちである。それではもし骨が欠けていた場合はどうなるのだろうか。

その答えは「もし骨を欠いてしまえば、復活後もその部分は欠けたまま」である。グリムのドイツ伝説集の『おぼれた子供』(Das ertrunkene Kind<sup>38</sup>)という話はそのタイプの一つである。この話では母親が湖でおぼれた我が子の骨を集め教会に持ち込むと、子供は生前の姿に戻っているが、右手の小指の骨が足りなかったため、子供は指の骨を少し欠いたまま復活してしまった。

同様にアイルランドに伝わる『エリン国王の息子とレイン湖の巨人』<sup>39</sup>

36 I. オウビー／M. テイタム編 (山形和美監訳)：『英語迷信・俗信事典』、大修館、1994年、410ページ。

37 オウビー／テイタム編 (山形監訳)、1994年、410ページ。

38 Herausgegeben von den Brüdern Grimm: Deutsche Sagen. Frankfurt am Main, 1999, S. 93ff.

39 J. カーティン (安達正／先川暢郎訳)：『アイルランドの神話と民話』、彩流社、2004年、9～23ページ参照。

の話では、エリン国の王子が枝のない高さ900フィートもの高さの木のてっぺんからからすの卵を取ってくる際、巨人の娘を一度殺し、肉をはぎ取った骨を踏み台代わりに使っている。しかし王子は娘の忠告を忘れ木から下りる際、最後の一段に使った骨を踏むのを忘れたため、娘は人間の姿に戻った後も足の小指が一本欠けたままだった。

フランスの話では、放蕩息子が悪魔の末娘を切り刻み、肉を剥がした骨を梯子代わりに、山の頂上からキジバトの卵を三つ取ってくるのに利用した。ところが左手の小指の爪を頂上においてきてしまったため、復活した悪魔の娘は左手の爪がないままではいなければならなかった<sup>40</sup>。

この少しばかりの喪失は、動物にも当てはまった。レーリッヒは言う。「あるスコットランドのメルヒェンは、一匹の羊が毛皮や骨から生き返ったということを語っている。けれどもこの羊には障害が残ってしまった。何故なら蹄のことを忘れ去られていたからだ」<sup>41</sup>。

だが骨が足りなくても復活できるだけ幾分ましかもしれない。民間信仰では通常、骨は一本でも欠けてしまえば復活はできないとされている。そのため死者の復活を願う場合、その人の骨は丁重に扱われ、入念に集められる必要がある。死んでも復活することのできた、先に挙げた『ねずみの木の話』『性悪な母親』『緑の雄鶏』のメルヒェンではどれも、死者の骨は遺族によって丁重に扱われている。が、一方骨が集められることのなかった『唄う骨』の主人公は、そのまま永遠に元の姿に戻ることなく墓に埋められている。

人間だけでなく、人々の食糧であった動物たちもまた、骨が残っていれば復活できるとされていた。たとえばオーディンは戦死者に雄豚ゼーリムニルの肉をふるまっている。そのため雄豚は毎日屠られるが、夕方には元の姿に戻りブゥブゥ鳴いている<sup>42</sup>。

復活を願うものの骨に対しては、たとえそれが人間以外でも丁重に扱わなければならない。それ故かつての人々は、動物たちの骨にもまた敬

---

40 新倉、1993年、52～63ページ参照。

41 Röhrich, Lutz: Märchen und Wirklichkeit. Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1974, S. 70.

42 テッツナー（手嶋）、1998年、105～110ページ参照。

意を払っている<sup>43</sup>。

そしてこの考えは、現代でも狩猟民族の間で踏襲されている。ポドマスキンによると、ロシアの「狩人たちは捕獲する動物の体の構造を完璧に知っており、非常に巧みに動物の皮を剥ぎ、内臓を取り出し、肉にすることができる。動物を解体するときには、骨を断つことは許されず」<sup>44</sup>、当然、骨を折ったり傷つけたりすることも許されていない。

時には動物たちは人々にとって単なる食糧以上のもの、すなわち幸運をもたらすものと見なされることもあった。その例としてフランスのメルヒェン『カタリーナ』<sup>45</sup>が挙げられる。その中で山羊はカタリーナに自分の骨を全て、かごに集めて入れることを命じている。その後カタリーナがその骨のところに行くと、骨は彼女の願いを叶えてやっている。

## 1.2. Aberglaubenにおける骨との対比

ここでドイツの民間信仰を覗いてみよう。すると前述した「復活」以外に骨にまつわる様々な迷信が見出される<sup>46</sup>。

一例として、農家では骨はネズミやモグラを追い払う力を持つものとして、オステルンや聖金曜日などの特別な日に地中に埋められたり、投げられたりした。また動物を追い祓うだけでなく、悪魔や魔女から身を守るためにも骨が使われた。

しかし時には魔術的ものを追い祓うためではなく、自らにそれを取り入れるためにも利用された。

---

43 トンプソン・インディアンに伝わる『狩人と山羊』という話では、父親が食べた山羊の骨の一部を持ち去ったと知り、山羊たちを辱めたと息子が父親を詰る場面がある。ハワード・ノーマン編（松田幸雄訳）：『エスキモーの民話』、青土社、1995年、339～342ページ参照。

44 V. V. ポドマスキン（佐々木史郎訳）：『十九世紀から二十世紀におけるアムール川下流域とサハリンの先住民の動物の世界に関する民俗知識』、佐藤宏之編：『ロシアの狩猟文化史』、慶友社、1998年、269ページ。

45 小沢俊夫編（安達茂之／沼田俊則訳）：『世界の民話②南欧』、ぎょうせい、1976年、55～60ページ参照。

46 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Stäubli: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd. 5, S. 6ff.

例えばドイツでは民間人が魔力を得るためにアマガエルの骨を利用した。その方法は全く人の手を煩わせないので、ただアマガエルをアリ塚に入れ、長い間放置しておけば肉は食べ尽くされ骨だけが残る。するとその骨にはもう魔法の力が宿っており、そのような骨を身につけている者は、願いが叶うと信じられていた。アリ塚に入れられたアマガエルも気の毒だが、次の例はもっと壮絶である。これは日時が「新年の夜11時」と指定されているだけでなく、「机、椅子、鏡のある明るく照らされた部屋」と場所まで指定されている。不思議な力を得たいと思った者は、真っ黒の牡猫を、11時になると火にかけた深鍋の中に放り込む。そしてそれを——猫の叫び声など気にせずに！——12時頃までぐつぐつ煮る。その後猫を鍋から取りだし、机の上に置く。煮えすぎてドロドロになった肉から骨を取り、それを高く挙げ、鏡の前に置く。するとダイヤモンドのように明るく、青い光が鏡の中から現れ、まもなく悪魔もやってくる。そうすると、その骨を持っていれば、いつでも何処でも思いのままに姿を消すことができるというのである。

この「骨を十分に煮る」という民間信仰を完全に体现しているのが、グリムの『のんき坊主』である。その中で聖ペートルスは、死んだ姫の「体中をバラバラに切り離し、それらを水を張った釜の中に放り込むと、その下で火を熾し〔骨を〕煮ました。そして全ての骨が体から離れると、きれいな白い骨を取り出して、テーブルの上に置くと、あるがままの順番に並べました」<sup>47</sup>。そして呪文を唱え、姫は無事に生き返っている。

ルッツは他に『悪魔の煤だらけの兄弟』(KHM100: Der Teufels rußiger Bruder) のロシアの類話やペロポス伝説も挙げ、これらは「自由に発想されたわけではなく、北アジア地域の観念や、現実に応じた対応関係を持つ慣習」<sup>48</sup>だと指摘する。

その他に民間信仰として、寝言を言う人の枕の下に納骨堂から持ってきた骨を置くと寝言が止む。人骨を枕の下にすると蚤や虱を防ぐというものもある。また処刑された者の骨を財布に入れておくと、商人に福をも

47 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 397.

48 Röhrich, 1974, S. 69-70.

たらずとも考えられていた。そのため納骨堂や教会墓地から、骨が盗まれてしまうことも珍しくなかった。

人骨のみならず動物の骨もまた、リウマチ、骨瘤、疣、潰瘍、癩癧、発疹などの民間治療薬として利用されてきた。

日本でも前世紀までは骨が何等かの治療薬になると信じられ、骨をめぐる血腥い犯罪が何件もおきている。藤井正雄は著書『骨のフォークロア』<sup>49</sup>の中で、明治・大正・昭和初期に日本で起こった骨がらみの事件を挙げているが、そこから肺結核、梅毒、喘息の治療のためとヨーロッパ同様、様々な用途に骨が使われていたことが見て取れる。

## 2. 現実における「骨」

### 2.1. 聖遺物崇拜

生年月日、干支、血液型や星座を基に個人の運勢を見る占いは、日本でも年齢を問わず人気のあるものである。インターネットで検索すれば夥しい数のサイトがヒットする。又本屋に行けば一つのコーナーが設けられているし、年に数回、必ずどこかの出版社が占いの特集を組んだ雑誌を刊行している。

しかしどちらかという今では占いは、趣味や娯楽の一つと見なされている。ところが元来占いは、人々の生活や政に関わる神聖で厳粛なものであった。そして骨も又この占いの道具として用いられていた。何故なら骨は生命の根本を司るモノの象徴とされ、そこには特別な力があると見なされていたからだ。そのため占いは「シャーマン」という特殊な地位にある者が行った。

それ故時にはシャーマンも又、その力を証明するために自ら骨から復活して見せなければならなかった。シベリア、ユカギール族は成長過程にあるシャーマンを殺し食べてしまう。「その骨はまず最初に撒かれ、それから再び集められ鍋に入れられ、シャーマンが再び魔力を身につけるまで煮られる。シャーマンは一旦死に、精神的に新しく変化したシャーマンの本質を証明するために再び起きあがらなくてはならないのだ」<sup>50</sup>。

49 藤井正雄：『骨のフォークロア』、弘文堂、1988年、62～71ページ参照。

50 Röhrich, 1974, S. 70.



ヨーロッパでは、ガチョウの胸骨を用いてその冬の気候を占っていた<sup>51</sup>。この動物の骨を使った占いは、アジアにも存在していた。それは中国でト（ぼく）と、呼ばれ牛の肩甲骨あるいは亀の腹部の甲を主に用い、これを火で焼いてできた「ひび」の様子から吉凶を占うものであった。

日本にも太占（ふとまに）と呼ばれる、獣骨を用いた占いがあった。それは中国同様、鹿の肩甲骨を焼き、できた骨のひびの形によって吉凶を占うものであった。

その他、靈魂の器として祭具・呪具としても骨を使用した。例えば東インド諸島、アンダマン島の人々は、頭蓋骨と顎骨には赤色の顔料と白い粘土で装飾し、それに飾りの紐を付け、脚骨は屋根に載せ、手足の骨、肋骨、椎骨は適当な大きさに解体し、頭蓋骨同様紐を通して、首から下げたり、頭に飾ったりして病気の治療・予防に用いた。

日本でも鈴鹿山麓の伊勢側では、雨乞いの際、牛馬の骨を焚いてわざと神の怒りを誘い、それによって雨を降らそうとした等、骨はあらゆる場面で利用された。

ヨーロッパでは「聖遺物」として、骨は崇拜の対象にもなった。そしてそれは「人間や動物たちの骨が原始民俗の信仰において、その価値が認められていたように、今日でも又遺物の中で我々の〔社会で〕大いなる意味を」<sup>52</sup>持ち続けている。

古代の人々にとって自然は予測のつかない謎に満ちたものであった。これだけ科学の発達した現代でも、自然現象全てを予測・把握することは不可能である。その上ひとたび自然が牙をむけば、我々はその前になす術もなく、呆然と立ちつくすしかないのだ。古代の人々にとって、自然が現代以上に不安定で、いかに驚異に満ちた存在であったかは想像に難くない。

そういった中で少しでも心理的不安を解消するために、人々は確固た

---

51 キリスト教化が進む中、この占いも「迷信的異教的なもの」として敵視・排斥の運命を辿っていく。早くも813年にはトゥール教会会議で、占い師をインチキな悪魔の手先として誹謗している。時代が下っても占いや、占い師の地位は回復せず弾劾の対象となった。

52 Bächtold-Stäubli, 2000, S. 6.

る存在を欲した。そこから絶対なる神や神々が生まれてきた。しかし天上界にすむ神・神々は人間の手には届かない。そのため天上界と人間とを繋ぐパイプライン、神性と人性とを兼備する存在が必要となった。その役目を担うものとして生まれてきたのが、天使、精霊、妖精、超人的英雄や、ユダヤ教の預言者、キリスト教の使徒や聖人である。

もともと聖人とは、殉教者のみを指していた。何故なら殉教とは、信仰の敵（悪魔や異教徒達）と命をかけて闘った結果である。その闘いの過程には、想像を絶する肉体的苦痛の連続があった。その中で自らの信仰を貫くためには、常人には持ち得ない強い神への愛が必要である。単なる人間であった聖人が、迫害や拷問に屈することなくキリスト教徒であり得た強い精神力は、肉体との最終的別れである死に臨み、そこで神との特別な関係と肉体を越えた霊力を生み出したおかげである。それ故彼（女）は「聖人」と崇められることとなった。

そして死後、聖人の遺体は地上に留まるが、魂は天国で祝福され、最後の審判の日には復活し、昇天することが神によって約束されている。

そして最後の審判の日まで地上に残された遺体は、人類の最終的救済を知ることのできる神の保証物であり、それは又、神の摂理を地上にもたらし、信者達の願いを神に取りなしてくれる特別な力を授けられたおかげで、様々な奇蹟を行うことができるありがたいモノ、すなわち「聖遺物」となった。

こうして聖者の遺体はキリスト教会と信者達によって、単なる「物体」以上の存在、「聖遺物」としてこの上ない崇敬の対象となったのだ。

聖遺物は後に、その数の絶対的不足から「聖人」の定義同様拡大されていく<sup>53</sup>。しかし「骨」はその性質上、絶対的なものとされた。

ではこの聖遺物崇拝は、キリスト教が独自に生み出したものだったのだろうか。答えは「否」である。この聖遺物崇拝の元となったものがキ

---

53 拡大解釈された「聖遺物」の中には、聖人が生前身につけていた遺品や杖やその断片のみならず、聖人がその上で眠った藁や、殉教地の土、その地にたてられた十字架、遺体を清めた水までもが聖遺物と見なされるようになる。特に殉教者の流した血が染みた衣類は、彼の肉体の延長であり、聖なるモノの分有物として最も貴重なモノと見なされた。

リスト教化される以前のヨーロッパにすでに根付いていたのである。

## 2.2. アニミズム

自然界のあらゆる事物には、固有の靈魂や精霊などが宿っており、全ての諸現象はその意志や働きによるものである、と見なす信仰を「アニミズム」という。

アニミズムという名は「昔のラテン語でアニマ、すなわち何らかの靈的な存在を表す」<sup>54</sup>言葉から派生した。「B. G. タイラーによると、アニミズムははっきりとした肉体を持つ、あるいは持たないにかかわらず、靈的なものが存在すると信じることであり、それは全ての未開民族におけるの宗教であり、哲学である。又それ〔アニミズム〕は人類のあらゆる発展の基礎、もしくは第一段階であり、そこから全てのより高い精神活動、特に宗教と芸術が生まれた」<sup>55</sup>。更にタイラーは、「未開の人々が感じる——その感覚はあらゆる文化階層を通じて存続してきたものではあるが——靈を、ぼんやりとした肉体を持たないモノと定義する。それは肉体が存在しない世界においてさえ個性を発揮し、はっきりと認識される。このように基礎づけられたアニミズムは、何らかの方法で人間に作用する全てのモノと、人間の目に留まるありとあらゆる現象は、思考し、意志を持つ靈的存在によって引き起こされると考えることであり、又何らかの現象の原動力となる存在・事物は、そういった精神や魂によって動かされていると考えることなのだ」<sup>56</sup>と続ける。

つまりアニミズムは人間が文明化される以前に持っていた、宗教の原始段階であり、肉体の有無にかかわらず、ありとあらゆるモノに靈が存在し、それが様々な現象を引き起こすと考える宗教・思想である。

例えば青々と茂った木々が秋には色を変え、冬には葉っぱを落とすのも、木々に宿る靈魂や精霊がそうさせるのである。

54 保坂幸博：『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』、新評論、2003年、146ページ。

55 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Stäubli: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. 1. Walter de Gruyter. Berlin. New York, 2000, S. 440.

56 Herausgegeben von Bächtold-Stäubli, 2000, S. 441.

そしてこのアニミズムはかつてのゲルマンの地にも根付いていた。自然を拜し、自然とともに生きる古代の人々の間には、後にキリスト教がもたらした人間と自然との境界線や、神を頂点とし、その下に人間、動植物があるとするヒエラルヒーなど存在しなかった。

人々は川や泉、森や石などあらゆるものを神聖視し、そこで様々な供儀を行った。特に彼らにとって「樹木」は最も神聖なものの一つだった。というのもゲルマン人は神々の手で、男はトネリコの樹から、女は楡の木から創られた、と信じられていたからだ<sup>57</sup>。

当然これらの「聖なるもの」を傷つけるものは重罪であり、厳しく罰せられた。例えばドイツでは樹の皮を剥いだ者に対して、腹を割いて腸を全て引きずり出される「腸引き出しの刑」が適用された<sup>58</sup>。

人々は自然を畏敬し、自然の中で生きていた。ところがそこにキリスト教がやって来る。キリスト教の布教活動は、375年に始まったゲルマン民族の大移動によって一旦は中断されるが、6世紀に入りようやく人口の流動が収束すると、ゲルマン民族に対するキリスト教布教が、再び活発化する。

けれども人々は、自然崇拝の多神教を信奉する古来のゲルマン信仰から離れようとはしない。キリスト教にとって自然は、人間のために存在するものであり、人間が統治・管理するものである。そのような思想の上に成り立つキリスト教徒にとって、自然は全く価値のないものであり、「それらを崇拝することは、単に低級な行為であるだけでなく、超自然的存在である神の崇拝に違反する行為、すなわち神に対する不敬虔」<sup>59</sup>である。

その上ゲルマンのアニミズムは多神教であった。この「アニミズム＝多神教」は、我々日本人にとっては至極当然のことである。「八百万の神々」という言葉にあるように、神は決して一人ではない。身の周りの

---

57 テッツナー（手嶋訳）、1998年、61ページ、並びにBrüder Grimm, 1999, S. 450-451. 参照。

58 谷口幸男：『ゲルマンの民俗』、溪水社、1987年、186ページ。

59 保坂、2003年、130ページ。

至る所に存在している。火、水、風、天、山、樹木、川等々。

だが古代ゲルマン人や、現代でも尚アニミズム思想が生きている日本人にとっては然のことも、多神教だの自然崇拝だのは、キリスト教にとっては到底理解できるものでもなければ、許せるものでもなかった。

しかし脈々と人々の間で受け継がれてきたものを、すっかり拭い去ってしまうことなどできるはずもない。けれどもゲルマンの地にキリスト教を布教するためには、どうしてもこのアニミズムを除去しなければならない。

そこでキリスト教は、比較的平和的手段として、「すり替え」を行った。つまり彼等の祝祭をキリスト教に関連するものにすり替えることで、ゲルマンの神々を舞台裏へと追放したのだ。

農業暦は、特定の聖人の記念日に書き改めた。ゲルマン人にとって聖なる樹木で十字架を作り、教会を建てた。そしてその中で男は「神」が樹ではなく、土からその御姿に似せて創り、女は男と同じ材料から創られるのではなく、神がお創りになった男の肋骨からできたのだと説いた<sup>60</sup>。

ゲルマンの神々の名が付けられた泉は聖人の名に結びつけ、その水で洗礼を施すなどして、あらゆることをキリスト教に流用した。そして本来キリスト教は偶像崇拝を認めていなかったが、民衆の骨に対する思いもまた「聖遺物」として利用した。

祭壇に置かれた聖遺物は象徴化・神秘化され、教会堂の核となった。その一方で聖人・聖遺物には治癒力があり、悪魔祓いもできるとことを強調し、民間の医療・呪術は「迷信」や「魔術」の刻印を押し、その使用者はいつしか弾圧・処刑されるに至った。

こうしてキリスト教は土着のアニミズムを覆い隠し、閨の声を上げたのだ。

---

60 女の祖エーファ（イヴ）は、「肋骨から創られた」という点に着目してほしい。キリスト教は原始宗教であったアニミズムを否定しているが、他ならぬキリスト教の教えの中に、「骨から新たな生命が生まれる」というアニミズム思想を、このエーファの源が踏襲している点が窺える。

### 3. 結び

以上見てきたように、かつてはヨーロッパでも骨を丁重に扱い、神聖視してきた時代があった。しかしキリスト教化が進み、アニミズムがその陰に隠れてしまうと、人々は聖人などを除いた骨以外には、殆ど敬意を払わなくなってしまった。その結果「骨」を残す火葬や「骨」に執着する民族が、彼らにとっては理解しがたいものになってしまった。

もちろん我々日本人も、遺された骨から故人が蘇るなどと信じているわけではない。そう信じるには世の中はあまりにも科学化しすぎている。

科学は人々に理性を与え、それにより様々な思想転換がなされるに至った。一例を挙げるなら、もはや神が人間の犠牲を必要としなくなったことだ。

1843年、ドイツのハレでは新たに橋を築く際、子供が人柱にされた<sup>61</sup>。チューリンゲンの伝説によると、「リーベンシュタイン城を迅速に建設、かつ難攻不落の城にするために、母親から大金を積んで買い取った子供が連れてこられ壁の中に埋められ」<sup>62</sup>た。

スコットランドでは、古代ピクト人<sup>63</sup>が由緒ある物を建築する場合には、人の血の染みこんだ石をその基礎に用いた、という話が残っている<sup>64</sup>。あるいは17世紀の日本でも、大壁建築の折、自ら進んでその中で生き埋めになる者がいれば事故が起こることなく、それを建てることができるという言い伝えがあった<sup>65</sup>。

これらの歴史的事実、あるいはまことしやかに語られた伝説は、堅固な物を建てるには、人間の生命という犠牲を必要としたことを示している。

だが現代ではある程度の文明国家であれば、何を建てようとも誰も血

---

61 Tylor, Edward Burnett: The origins of culture. Harper & Row, Publishers, New York and Evanston, 1958, S. 104.

62 Tylor, 1958, S. 104.

63 ブリテン北部に住んでいた古代人。

64 Tylor, 1958, S. 104.

65 Tylor, 1958, S. 107.

を流す必要はない。

それどころか人命など何の役にも立たないことを誰もが知っている。

このように科学は徒らに犠牲者を出すことを阻止した代わりに、人々から夢や幻想といったものを片端から奪いもした。かわいがっていたペットが死んで泣く子に「骨の配列を間違わなければ、そこから（ペットが）生き返ってくるよ」などといって宥める親は、おそらく「近代化」した世界のどこにもいないだろう。死者の体中の骨を正しい位置に並べてみたところで、その人が再びほほえんでくれることはないことは、誰もが知っている。かつてのアニミズムの究極の願いであった「死者の復活」というものは、残念ながら近代化の流れの中に飲み込まれてしまった。

しかし今「骨からの復活」というのが、太古の信仰とは異なった意味でなされているのも事実である。たとえばそれは考古学の分野で顕著である。

土の中から発掘された骨は、当時の人々の体型や特徴を物語るし、果たして「人食いの習慣」が本当にあったかどうかの問題にも、骨を調べることによって、決着を付けることができそうである<sup>66</sup>。それどころかホモ・サピエンスがどこから発生したのか、という問題解決にも骨は大きく貢献してくれる<sup>67</sup>。

又頭蓋骨が残っていれば、それに肉付けをし、復顔することも、どんな声をしていたのかを割り出すことも可能である。骨の状態にもよるが、性や年齢、身長といった外見的特徴だけでなく、発育の遅滞や栄養状況、女性なら出産経験があるか、あるとすれば何回出産したかまでわかるというから驚きである<sup>68</sup>。

我々は異文化——特にアジア圏以外の地域——を見ると、そこを自分たちとは全くかけ離れた意識・生活を持つところ、と考えがちである。だが骨を手がかりにヨーロッパを眺めてみれば、この極東の島国も、広

66 日経サイエンス2001年10月号掲載、『カニバリズムの起源』、日本経済新聞社。

67 2003年6月12日木曜日付、朝日新聞参照。

68 片山一道：『故人骨は語る——骨考古学ことはじめ』、同朋舎、1990年、26～54ページ参照。

大なヨーロッパの地も同じ思想からスタートしたことが窺い知れたように、ほんの少し身をかがめて「既存の文化」にあるものの下をじっくり観察してみれば、数多くの共通点を見いだすことが可能である。

「異文化だから分からない」の一言で終わってしまうのではなく、お互いが少しずつ歩み寄って見れば、我々はもっと相手を、そして自分たち自身の文化もまた、より深く理解できるのではないだろうか。そしてその姿勢こそが、今後ますますグローバル化される時代の中で、最も必要とされるものである。

#### 主要参考文献

- Lüthi, Max: Volksmärchen und Volkssage. A. Francke AG Verlag, Bern, 1961.  
Scribner, Robert W: Religion und Kultur in Deutschland. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 2002.  
Tylor, Edward Brunett: Religion in Primitive Culture. Harper & Brothers Publishers, New York, 1958.  
Ohlmarks, Ake: Studien zum Problem des Schamanismus. Skanska Centraltryckeriet, Lund, 1939.  
Hartlieb, Johannes: Das Buch der Verbotenen Künste. Eugen Diederichs Verlag, 1998.  
Johannes Bolte/Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder-u. Hausmärchen der Brüder Grimm. Georg Olms Verlag, 1963.  
Scherf, Walter: Das Märchenlexikon. C. H. Beck Verlag, München, 1995.  
Lüthi, Max: Märchen. J. B. Metzler Verlag, Stuttgart, Weimar, 1996.  
アンドレ・ヨレス（高橋由美子訳）：『メールヒェンの起源』、講談社、1999年。  
ジャン・クロード・シュミット（松村剛訳）：『中世の迷信』、白水社、1998年。  
C.ドウソン（野口啓祐訳）：『新版 中世のキリスト教と文化』、新泉社、1996年。  
ジェイムズ・ラッカム（本郷一美訳）：『動物の考古学』、學藝書林、1997年。  
吉村作治編集主幹：『Newton アーキオ Vol. 12』、ニュートンプレス、2002年。  
山折哲雄：『死の民俗学』、岩波書店、1990年。  
松原秀一／養老孟司／荻野アンナ：『死の発見』、岩波書店、1997年。  
高橋繁行：『葬祭の日本史』、講談社、2004年。  
桜井徳太郎：『民間信仰辞典』、東京堂出版、1980年。  
青山吉信：『聖遺物の世界 中世ヨーロッパの心象風景』、山川出版社、1993年。  
藤井治彦他：『道と巡礼 ― 心を旅するひとびと ―』、山川出版社、1993年。



今野國雄：『巡礼と聖地』、ペヨトル工房、1991年。

聖心女子大学キリスト教文化研究会編：『巡礼と文明』、春秋社、1987年。

杉島敬志編：『人類学的実践の再構築』、世界思想社、2001年。

祖父江孝男：『文化人類学入門 増補改訂版』、中央公論社、1990年。

## „Knochen“ erzählen Europa.

Kayo ONITSUKA

In Japan ist es nicht selten, dass Hinterbliebene miteinander um die Knochen streiten. Denn viele Japaner tragen auch noch jetzt, bewusst oder unbewusst, Animismus im Herzen, d.h. in allen Dingen einen Geist zu empfinden. Animismus ist eine der Urreligionen, und man kann ihn als eine Naturverehrung bezeichnen. Man glaubt, dass in allen Dingen der Welt eine eigene Seele oder ein Naturgeist lebt und alle Erscheinungen durch die Seelen oder die Geister verursacht werden. Diesen Gedanken gab es und gibt nicht nur in Japan sondern in der ganzen Welt.

Aber in der christlichen Gesellschaft wurde die Natur an die niedrigere Stelle als Menschen gesetzt. Die Natur existiert dort für Menschen und soll von ihm beherrscht werden. Niedriger als Menschen sind dann noch orientiert. Animismus wurde inzwischen als Glauben angesehen, der religionshistorisch oder ethnologisch „den nicht zivilisierten Völkern“ eigentümlich ist.

Andererseits leben Urreligion, wie Animismus, in Japan doch noch heute. Das beweist z.B. die Zeremonie bei der Beerdigung. Die meisten Japaner werden eingeäschert, und dann werden die verbrannten Knochen mit Hochachtung und beerdigt. Diese Sitte müssen Europäern etwas seltsam vorkommen. John McManners stellt in seinem *Death and the Enlightenment*, dieses japanische Verfahren sehen kann eine sonderbare Sitte, wie man sie in primitiven Gesellschaften gesehen kann.

Wenn das so ist, hat man dann in Europa überhaupt keine besonderen Gefühle für die Knochen gehabt?

Dieser Frage möchte ich indem ich anhand Grimms „Kinder- und Hausmärchen“ nachgehen. Denn Grimms Märchen sind ein Erbe der germanischen Völker. Auch die Tatsache ist wichtig, dass Grimms Märchen Volksmärchen sind. Jedes einzelne Märchen war zweifellos aus alter Zeit überliefert und uns von der Brüdern Grimm mitgeteilt worden. Dieses unschätzbare Erbe sollten wir nicht vernachlässigen.

Es gibt fünf Märchen, die etwas mit Knochen zu tun haben:

„Der singende Knochen“ (KHM28), „Fitchers Vogel“ (KHM46), „Von dem Machandelboom“ (KHM47), „Die Krähen“ (ohne KHM), und „Bruder Lustig“ (KHM81)

Knochen, die in diesen Märchen vorkommen, können in die drei Typen eingeteilt werden.

1. Knochen spielen kaum eine Rolle („Fitchers Vogel“, „Die Krähen“)
2. Knochen dienen als Ankläger („Der singende Knochen“, „Von dem Machandelboom“)
3. Knochen dienen als Anlass zur Wiederbeleben („Von dem Machandelboom“, „Bruder Lustig“)

Ich konzentriere mich auf 2 und 3 Typen. „Der singende Knochen“ eines Toten bringt einen Mord ans Licht, den sein Bruder verübte. Auch der an der Wurzel „von dem Machandelboom“ aus gegrabene Knochen eines Jungen, der von seiner Stiefmutter getötet wurde, verwandelt sich in ein Vogel und nimmt Rache an der Mutter. Solche Märchen befinden sich in verschiedenen Variationen überall in der Welt. Der Knochen hat in jedem Märchen die Aufgabe, Übeltaten ans Licht zu bringen.

In dem Märchen „Von dem Machandelboom“ wird der Vogel als Junge wiedergeboren. In „Bruder Lustig“ wird neugeboren auch eine Prin-

zessin, indem Knochen in richtiger Reihenfolge gelegt. Diese Beispiele zeigen, dass Knochen in den germanischen Völker besondere Kraft hatten, erneut Leben hervorzubringen oder einen Toten wieder in die Welt zurückzuleben.

Der Knochen ist ein Symbol des natürlichen Lebens und auf der ganzen Welt zum Gegenstand des Glaubens. Die Reliquie ist auch ein solcher. Die Kirche benutzte sie bei der Mission in germanischen Gebieten, aber der Glaube an Knochen selbst ist in der christlichen Gesellschaft allmählich verschwunden.

Japaner neigen zu glauben, dass die Europäer eine andere Weltanschauung haben. Aber wenn man einmal unbefangen hört, was Knochen erzählen, dann erkennt man sicher, dass wir die gleiche geistige Wurzel haben.